

「女性酪農家としての野望」

宮崎県立都城農業高等学校 畜産科3年 財部 香奈愛

「怖いから連れて行かないで！ごめんなさい！」大きな体に、大きな蹄、よだれは垂らすし、たまに鞭のようなシッポでびちっと叩かれる。声もデカけりゃ、鼻息も荒い。とにかく何を考えているのかわからない。私は幼い頃、牛がととても怖かったため、両親は私を叱るときには必ず「牛舎に連れて行くぞ！」というのが口癖でした。私の家では約60頭の乳牛を飼育している酪農家です。酪農という仕事は必ず毎日1日に2回搾乳をしなければ牛が病気にかかってしまいます。そのため、幼少期は旅行や遊びに連れて行ってもらいたくても、どこへも連れて行ってもらえませんでした。私はそんなに仕事が忙しいのならやめてしまえばいい、こんな仕事も牛も大嫌いだ、とっていました。そう思いつつも家族経営の我が家は、とにかく人手が足らず、私たち兄弟姉妹は小学校の時から学校が終わるとまっすぐに牛舎に向かい、夜遅くまで黙々と手伝いをしてきました。

私は好きでもない牛の世話を毎日嫌々やっていました。そんなある日、哺乳させている仔牛と目が合いました。愛情のかけらもなく、ただ哺乳しているだけの私を信用しきって、キラキラの目でまっすぐ見つめています。一生懸命にミルクを飲んでる仔牛を改めて見て、「牛って意外とかわいいかも。どうして今までそれに気が付かなかったのだろう。」と思いました。そして、私が愛情をもって大切に接すれば接するほど、牛たちも答えてくれることを知り、もっともっと牛に関わりたいと思うようになりました。牛との関わりが深くなるにつれて、酪農という仕事に興味を持つようになりました。私は4人兄弟の末っ子で、家の仕事は兄が継ぐことになっていたのですが、私は「将来は

自分の力で酪農経営したい！」と思うようになりました。早速このことを家族に話したところ、賛成してくれると思った家族から「女子のお前に酪農経営は厳しいだろう」と思いもよらない言葉を言われました。そのとき私は自分が女性ゆえに感じた偏見や悔しい思いがこみ上げてきました。せっかく見つけたと思った夢をつぶされた、そんな気持ちで一度燃え上がった私のやる気は一気になりました。

そんなある日、兄の友達が元気のない私に声をかけてくれました。そのときに「自分は元々非農家だったが、高校の授業で酪農に興味を持ち、将来は酪農をしたいと思うようになった。そして酪農学園大学に進学し、一生懸命勉強し、乳牛に愛着を持って日々努力してしたことが報われて、アルバイト先の酪農家さんの経営を継ぐことになり、今は経営者として頑張っているんだ。」と話してくれました。非農家の彼でもここまでしっかりと夢を叶えられるのだから、私にだってできないはずはない、と思えるようになり、諦めかけていた夢を再び見つめなおすきっかけとなりました。

その後、私は畜産を専門的に学べる都城農業高校に進学しました。畜産科には自分と同じような家庭環境の生徒や、自分と同じような目標を持つ生徒などたくさんの仲間がいます。そんな仲間たちと牛の話や情報交換できるのがとても楽しいです。授業では毎日多くの学びがあります。学校の乳牛の管理は家とは違い、手入れや餌の配合など、今まで知らなかった飼育方法があることを知り、同じ酪農でも様々な飼育方法があることを学びました。

入学と同時に入部した畜産研究部では、家ではし

ない、毎日牛洗いや毛刈り、調教もするようになりました。牛の調教では「もう！どうして動いてくれないの！」「ねえ～、もっと、落ち着いてよ！」と、最初はなかなか思うように動いてくれない牛に憤りを感じることもありましたが、毎日欠かさず調教することで、牛との信頼関係ができ、言うことを聞いてくれるようになりました。そうなってくると、牛がかわいくてたまらなくなり、気が付くと全部の牛に名前を付けて「ミライただいま！」「ねえ、リズ、今日は学校でこんな事があったんだよ。」と牛に話しかけている私がいきました。

ある日、総合実習の授業で「酪農家さんが、子どもたちに向けて酪農教育ファーム」を行っている動画を見ることができました。私は「これだ！」と思いました。女性酪農家として、生乳生産をするだけの牧場ではなく、人間に利用される、食べられるために生まれてきた乳牛のかわいらしさや、命や食のありがたみを実際に牛に触れてもらいながら、子どもたちに伝えられる牧場経営をしたいとはっきりとイメージするようになりました。食料自給率の低迷が問題となっている日本で、生乳は100%国産の食品。そんな仕事に誇りをもって、子どもたちに伝えられたらどんなに素晴らしいだろうと思います。力の差など、男性に敵わないことはたくさんありますが、逆に乳牛もすべて女子です。女同士だからこそ牛の気持ちに寄り添える。牛にやさしい酪農もできるはずです。

その夢を叶えるために、これからの学校生活では今まで以上に地元の畜産農家や関係機関との交流を図り、視野を広げたいと考えます。そして、大学へ進学し、知識技術のさらなる習得を目指します。卒業後は、全国の酪農家をまわり、様々な経営方法を学んだ後に宮崎の観光にも寄与できるような、教育ファームを取り入れた酪農経営者になりたいです。そして、いつか私自身が女性酪農経営者のモデルとなり、経営を目指す若い世代や女性を増やしていけたらと思います。酪農の世界

も、機械化やデジタル化が進み、作業の負担も軽減されつつあります。「きつい」、「汚い」、「臭い」の3Kではなく、「きつくない」、「きれい」、そして「かっこいい」新3Kの香奈愛スタイルの酪農の夢を叶えてみせます！